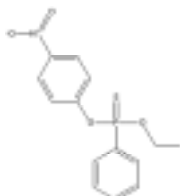


[8] EPN

1. 物質に関する基本的事項

(1) 分子式・分子量・構造式

物質名：EPN	
CAS 番号：2104-64-5	
分子式：C ₁₄ H ₁₄ NO ₄ PS	
分子量：323.3	
構造式：	

(2) 物理化学的性状

本物質は原体では淡褐色の油状液体で、常温では一部結晶化する¹⁾。

融点	36 ²⁾
沸点	215 (5mmHg) ³⁾
蒸気圧	0.126mPa(25) ³⁾
n-オクタノール/水分配係数 (log Pow)	3.85 ⁴⁾
水溶性	3.113mg/L(20 ~ 22) ⁵⁾

(3) 環境運命に関する基礎的事項

本物質の分解性及び濃縮性は次のとおりである。

<p>分解性</p> <p>好氣的：難分解⁶⁾</p> <p>非生物的：</p> <p>(OH ラジカルとの反応性)：大気中での速度定数を $7.4 \times 10^{-11} \text{cm}^3/\text{分子} \cdot \text{sec}(25)$、OH ラジカル濃度 $5 \times 10^5 \text{分子}/\text{cm}^3$ とした時の半減期は 5 時間と計算される⁷⁾。</p> <p>BOD から算出した分解度：</p> <p>3%(試験期間：4 週間、被験物質：100mg/L、活性汚泥：30mg/L)⁶⁾</p> <p>生物濃縮係数 (BCF)：659 ~ 1,590(試験期間：8 週間、試験濃度：10μg/L)、358 ~ 1,520(試験期間：8 週間、試験濃度：1μg/L)⁶⁾</p>
--

(4) 製造輸入量及び用途

生産量・輸入量等

本物質の平成 12 農薬年度における国内生産量は原体が 204.6t、粉剤が 215.8t、乳剤が 260.3kL、輸出力は原体が 66.0kL、中間体が 230.0kL である¹⁾。

用途

本物質の用途は殺虫剤である¹⁾。

2. 暴露評価

環境リスクの初期評価のため、水生生物の生存・生育を確保する観点から、実測データをもとに基本的には特定の排出源の影響を受けていない一般環境等からの暴露を評価することとし、安全側に立った評価の観点からその大部分がカバーされる高濃度側のデータによって暴露量の評価を行った。原則として統計的検定の実施を含めデータの信頼性を確認した上で最大濃度を評価に用いている。なお、多数のデータが得られている場合は、95パーセンタイル値を参考として併記している。

(1) 環境中分布の予測

EPNの環境中の分布について、各環境媒体間への移行量の比率をEUSESモデルを用いて算出した結果を表2.1に示す。なお、モデル計算においては、面積2,400km²、人口約800万人のモデル地域を設定して予測を行った¹⁾。

表2.1 EPNの各媒体間の分布予測結果

		分布量(%)
大	気	0.0
水	質	0.36
土	壤	81.7
底	質	17.9

(2) 各媒体中の存在量の概要

EPNの水質及び底質中の濃度について情報の整理を行った。各媒体ごとにデータの信頼性が確認された調査例のうち、より広範囲の地域で調査が実施されたものを抽出した結果を表2.2に示す。

表2.2 EPNの水質、底質中の存在状況

媒体	幾何平均値	算術平均値	最小値	最大値	検出下限値	検出率	調査地域	測定年	文献
公共用水域・淡水 μg/L	<1	<1			0.5~6	0/1239	全国	2000	2
	<1	<1	<0.1	0.6	0.1~6	3/1412	全国	1999	3
	<1	<1	<0.1	1.0	0.1~2	5/1624	全国	1998	4
公共用水域・海水 μg/L	<1	<1			0.5~1	0/213	全国	2000	2
	<1	<1			0.5~6	0/302	全国	1999	3
	<1	<1			0.1~2	0/339	全国	1998	4
底質(公共用水域・淡水) μg/g	<30	<30			30	0/3	全国	1986	5
底質(公共用水域・海水) μg/g	<30	<30			30	0/11	全国	1986	5

(3) 水生生物に対する暴露の推定（水質に係る予測環境中濃度：PEC）

EPN の水生生物に対する暴露の推定の観点から、水質中濃度を表 2.3 のように整理した。水質について安全側の評価値として予測環境中濃度（PEC）を設定すると、公共用水域の淡水域では 6 μ g/L 未満、同海水域では 1 μ g/L 未満となった。なお、公共用水域・淡水において、1998 年から 2000 年の間の環境中濃度には漸減が認められる。

表2.3 水質中のEPNの濃度

媒体	平均	最大値等
	濃度	濃度
水質 公共用水域・淡水	1 μ g/L 未満 (2000)	6 μ g/L 未満 [1 μ g/L 未満] (2000) (1998 年～2000 年の検出最大値として 1.0 μ g/L が得られている(1998))
公共用水域・海水	1 μ g/L 未満 (2000)	1 μ g/L 未満(2000)

注)：公共用水域・淡水は、河川河口域を含む。

3. 生態リスクの初期評価

生態リスクの初期評価として、水生生物に対する化学物質の影響（内分泌攪乱作用に関するものを除く）についてのリスク評価を行った。

(1) 生態毒性の概要

本物質の水生生物に対する影響濃度に関する知見の収集を行い、その信頼性を確認したものについて生物群、毒性分類別に整理すると表 3.1 のとおりとなる。

表3.1 生態毒性の概要

生物種	急性	慢性	毒性値 [μ g/L]	生物名	エンドポイント /影響内容	暴露期間 [日]	信頼性			Ref. No.
							a	b	c	
藻類			340	<i>Skeletonema costatum</i>	EC ₅₀ GRO	4				5297
			563	<i>Skeletonema costatum</i>	EC ₅₀ GRO	2				11070
			123,000	<i>Minutocellus polymorphus</i>	EC ₅₀ BMS	2				13180
甲殻類			0.06	<i>Daphnia magna</i>	EC ₅₀ IMM	26 時間				7984
			0.15	<i>Daphnia magna</i>	EC ₅₀ IMM	26 時間				7984
			0.29	<i>Penaeus duorarum</i>	LC ₅₀ MOR	4				5578
			0.43	<i>Daphnia carinata</i>	LC ₅₀ MOR	2				6956
			0.44	<i>Mysidopsis bahia</i>	NOEC REP	28				4891
			0.6	<i>Palaemonetes kadiakensis</i>	LC ₅₀ MOR	4				666
			1.35	<i>Mysidopsis bahia</i>	MATC REP	28				5578
			3.01	<i>Mysidopsis bahia</i>	LC ₅₀ MOR	4				4891
			3.44	<i>Mysidopsis bahia</i>	LC ₅₀ MOR	4				5578
			0.56	<i>Palaemonetes kadiakensis</i>	LC ₅₀ MOR	1				887
魚類			11.1	<i>Pimephales promelas</i>	NOEC GRO	31～34				14097
			18.3	<i>Lagodon rhomboides</i>	LC ₅₀ MOR	4				5578
			25.6	<i>Leiostomus xanthurus</i>	LC ₅₀ MOR	4				5578

生物種	急性	慢性	毒性値 [μg/L]	生物名	エンドポイント /影響内容	暴露期間 [日]	信頼性			Ref. No.
							a	b	c	
			32	<i>Lebistes reticulata</i>	TLm MOR	4				2893
			79	<i>Pimephales promelas</i>	LC ₅₀ MOR	4				14097
その他			1.1	<i>Culex tritaeniorhynchus</i>	LC ₅₀ MOR	1				8977
			1,800	<i>Physa acuta</i>	LC ₅₀ MOR	2				9158
			7,400	<i>Pteronarcys californicus</i>	LC ₅₀ MOR	4				666

太字の毒性値は、PNEC 算出の際に参照した知見として本文で言及したもので、下線を付した毒性値は PNEC 算出の根拠として採用されたものを示す。

信頼性) a : 毒性値は信頼できる値である、b : ある程度信頼できる値である、c : 毒性値の信頼性は低いあるいは不明
 エンドポイント) EC₅₀ (Median Effective Concentration) : 半数影響濃度、LC₅₀ (Median Lethal Concentration) : 半数致死濃度、MATC (Maximum Acceptable Toxicant Concentration) : 最高許容濃度、NOEC (No Observed Effect Concentration) : 無影響濃度、TLm (Median Tolerance Limit) : 半数生存限界濃度
 影響内容) BMS (Biomass) : 生物現存量、GRO (Growth) : 生長 (植物) 成長 (動物) IMM (Immobilization) : 遊泳阻害、MOR (Mortality) : 死亡、REP (Reproduction) : 繁殖、再生産

(2) 予測無影響濃度 (PNEC) の設定

急性毒性値及び慢性毒性値のそれぞれについて、信頼できる知見のうち生物群ごとに値の最も低いものを整理し、そのうち最も低い値に対して情報量に応じたアセスメント係数を適用することにより、予測無影響濃度 (PNEC) を求めた。

急性毒性値については、藻類では *Skeletonema costatum* に対する生長阻害の 96 時間半数影響濃度 (EC₅₀) が 340 μg/L、甲殻類では *Daphnia magna* に対する遊泳阻害の 26 時間半数影響濃度 (EC₅₀) が 0.15 μg/L、魚類では *Lagodon rhomboides* に対する 96 時間半数致死濃度 (LC₅₀) が 18.3 μg/L、その他の生物ではサカマキガイ類の *Physa acuta* に対する 48 時間半数致死濃度 (LC₅₀) が 1,800 μg/L であった。急性毒性値について 3 生物群 (藻類、甲殻類及び魚類) 及びその他の生物の信頼できる知見が得られたため、アセスメント係数として 100 を用いることとし、上記の毒性値のうち最も低い値 (甲殻類の 0.15 μg/L) にこれを適用することにより、急性毒性値による PNEC として 0.0015 μg/L が得られた。なお、甲殻類については、採用した毒性値に比べて小さな値 (*Daphnia magna* 遊泳阻害の 26 時間半数影響濃度 : 0.06 μg/L) が報告されているものの、試験水温が 25 と高いため採用しないこととした。

慢性毒性値については、魚類では *Pimephales promelas* に対する成長阻害の 31 ~ 34 日間無影響濃度 (NOEC) が 11.1 μg/L であった。慢性毒性値について 1 生物群 (魚類) の信頼できる知見が得られたため、アセスメント係数として 100 を用いることとし、慢性毒性値による PNEC として 0.11 μg/L が得られた。

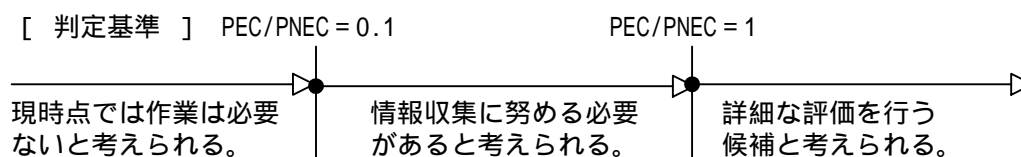
本物質の PNEC としては、甲殻類の急性毒性値をアセスメント係数 100 で除した 0.0015 μg/L を採用する。

(3) 生態リスクの初期評価結果

表3.2 生態リスクの初期評価結果

媒体		平均濃度	最大値[95 th - センタイル値]濃度 (PEC)	PNEC	PEC/ PNEC 比
水質	公共用水域・淡水域	1μg/L未満 (2000)	6μg/L未満 [1μg/L未満] (2000)(1998年~2000年の検出最大値として1.0 μg/Lが得られている(1998))	0.0015 μg/L	<4,000 (670)
	公共用水域・海水域	1μg/L未満 (2000)	1μg/L未満 (2000)		<670

- 注) : 1)環境中濃度での [] 内の数値は、実測値の 95 パーセンタイル値を示す。
 2)環境中濃度での () 内の数値は測点年を示す。
 3)公共用水域・淡水は、河川河口域を含む。
 4)PEC/PNEC 比 () 内の数値は 1999 年～2001 年の最大値との比を示す。



本物質の公共用水域における濃度は、平均濃度でみると淡水域・海水域ともに $1\mu\text{g/L}$ 未満であり、検出下限値未満であった。安全側の評価値として設定された予測環境中濃度 (PEC) は、淡水域では $6\mu\text{g/L}$ 未満、海水域では $1\mu\text{g/L}$ 未満であった。

予測環境中濃度 (PEC) と予測無影響濃度 (PNEC) の比は、淡水域では 4,000 未満であるが、1998 年から 3 年間の最大値 ($1\mu\text{g/L}$) でみると PEC/PNEC 比は 670 となるため、詳細な評価を行う候補と考えられる。一方、海水域ではこの比は 670 未満となるため、現時点では生態リスクの判定はできない。本物質は殺虫剤として用いられており、PNEC 値が $0.0015\mu\text{g/L}$ と小さい値を示している。したがって、今後は、検出下限値を見直した上で、散布時期や頻度等を考慮して海水域における環境中濃度の測定を優先的に行う必要があると考えられる。

4 . 引用文献等

(1) 物質に関する基本的事項

- 1) 化学工業日報社(2002) : 14102 の化学商品
- 2) Lide, D.R. (ed.). CRC Handbook of Chemistry and Physics. 73rd ed. Boca Raton, FL: CRC Press Inc., 1992-1993..p. 3-90. [Hazardous Substances Data Bank (以下、HSDB)]
- 3) Worthing, C.R. and S.B. Walker (eds.). The Pesticide Manual - A World Compendium. 8th ed. Thornton Heath, UK: The British Crop Protection Council, 1987. 339. [HSDB]
- 4) Hansch C, Leo AJ; Medchem Project Issue No. 26 Claremont, CA: Pomona College (1985). [HSDB]
- 5) Kanazawa J; Pestic Sci 12; 417-24 (1980). [HSDB]
- 6) 通産省化学品安全課監修, 化学品検査協会編, 化審法の既存化学物質安全性点検データ集, 日本化学物質安全・情報センター(1992).
- 7) Atkinson R; Inter J Chem Kinet 19: 799-828 (1987). [HSDB]

(2) 暴露評価

- 1: (財) 日本環境衛生センター 平成 13 年度化学物質の暴露評価に関する調査報告書 (環境庁請負業務)
- 2: 環境省環境管理局水環境部企画課 : 平成 1 2 年度水質汚濁に係る要監視項目の調査結果
- 3: 環境庁水質保全局 : 平成 1 1 年度水質汚濁に係る要監視項目の調査結果

4.株式会社富士総合研究所：平成 10 年度要監視項目等汚染状況解析調査報告書、平成 11 年 3 月

(3) 生態リスクの初期評価

1) データベース：U.S.EPA「AQUIRE」

2) 引用文献 (Ref. No. : データベースでの引用文献番号)

666 : Johnson, W.W., and M.T. Finley (1980) : Handbook of Acute Toxicity of Chemicals to Fish and Aquatic Invertebrates. Resour.Publ.137, Fish Wildl.Serv., U.S.D.I., Washington, D.C :98 p.

887 : Sanders, H.O. (1972) : Toxicity of Some Insecticides to Four Species of Malacostracan Crustaceans. Tech.Pap.No.66, Bur.Sports Fish.Wildl., Fish Wildl.Serv., U.S.D.I., Washington, D.C :19.

2893 : Pickering, Q.H., C. Henderson, and A.E. Lemke (1962) : The Toxicity of Organic Phosphorus Insecticides to Different Species of Warmwater Fishes. Trans.Am.Fish.Soc. 91:175-184.

4891 : Nimmo, D.R., T.L. Hamaker, E. Matthews, and J.C. Moore (1981) : An Overview of the Acute and Chronic Effects of First and Second Generation Pesticides on an Estuarine Mysid. In: F.J.Vernberg, A.Calabrese, F.P.Thurberg, and W.B.Vernberg (Eds.), Biological Monitoring of Marine Pollutants, Academic Press, Inc., NY:3-19.

5297 : Walsh, G.E., and S.V. Alexander (1980) : A Marine Algal Bioassay Method: Results with Pesticides and Industrial Wastes. Water Air Soil Pollut.13(1):45-55.

5578 : Schimmel, S., T.L. Hamaker, and J. Forester (1979) : Toxicity and Bioconcentration of EPN and Leptophos to Selected Estuarine Animals. Contrib.Mar.Sci. 22:193-204.

6956 : Nishiuchi, Y. (1979) : Toxicity of Pesticides to Animals in Freshwater. LXII. The Aquiculture /Suisan Zoshoku 27(2):119-124.

7984 : Crosby, D.G., R.K. Tucker, and N. Aharonson (1966) : The Detection of Acute Toxicity with *Daphnia magna*. Food Cosmet.Toxicol. 4:503-514.

8977 : Shim, J.C., and L.S. Self (1973) : Toxicity of Agricultural Chemicals to Larvivorous Fish in Korean Rice Fields. Trop.Med. 15(3):123-130.

9158 : Nishiuchi, Y., and K. Yoshida (1972) : Toxicities of Pesticides to Some Fresh Water Snails. Bull.Agric.Chem.Insp.Stn.12:86-92.

11070 : Walsh, G.E. (1983) : Cell Death and Inhibition of Population Growth of Marine Unicellular Algae by Pesticides. Aquat.Toxicol. 3(3):209-214.

13180 : Walsh, G.E., L.L. McLaughlin, M.J. Yoder, P.H. Moody, E.M. Lores, J. Forester, and P.B. Wessinger-Duvall (1988) : Minutocellus Polymorphus: A New Marine Diatom for Use in Algal Toxicity Tests. Environ.Toxicol.Chem. 7(11):925-929.

14097 : Call, D.J., S.H. Poirier, C.A. Lindberg, S.L. Harting, T.P. Markee, L.T. Brooke, N. Zarvan, and C.E. Northcott (1989) : Toxicity of Selected Uncoupling and Acetylcholinesterase-Inhibiting Pesticides to the Fathead Minnow (*Pimephales promelas*). In: D.L.Weigmann (Ed.), Pesticides in Terrestrial and Aquatic Environments, Proc.Natl.Res.Conf., Virginia Polytechnic Inst.and State Univ., Blacksburg, VA:317-336.